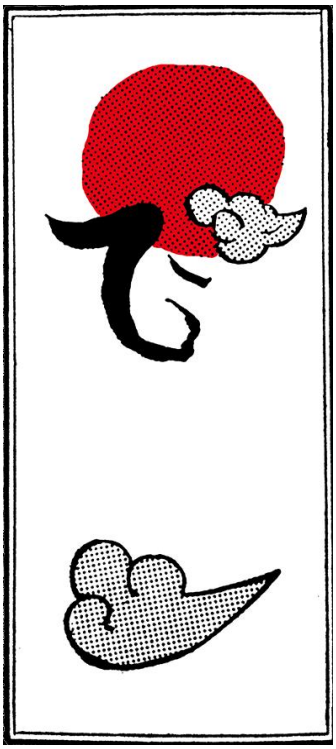

第35号
月一回発行
ひの心を継ぐ会
〒799-1336
住所：愛媛県西条市
上市甲720-1
TEL：080-2986-0856

領綱

一　私達は明徳を明らかにします
一　私達は国家の鎮護となります
一　私達は大和世界を建設します

神道（十一）（大和世界の建設）

竹葉　秀雄

古事記

宇宙の創始

―実在―（一）

「汝自らを知れ」ソクラテス

「汝自らを知れ」というデルフォーの神殿に掲げられたモットーを、哲学の指針としたソクラテスは、哲学の本質を叫び、西洋哲学の淵源をなしたものである。

彼（BC四七〇―三九九）は、当時のアテナイの政界の混乱と市民の自己喪失（現代の日本と同じ）を憂いて、青年たちと徳について、街道に於て問答した。それは「霊魂の気づかい」または「知恵の愛求」と自称したところの道徳意識の吟味、人間改造の事業であった。皮肉で厳しい「問答法（ディアレクティケと言われる）」による人間改造の事業は、民主派のみでなく貴族派をも鋭く非難する批判的中立者の立場に立ち、僅かの門弟達以外の多数の市民から、当時のソフィストたちと同様に誤解され、嫌われ、遂に「三十僭主」を打倒した再建民主派政府のもとで、既に七十歳を越えたソクラテスは、国家公認の者に不敬なる者、また青年を毒する者との罪名で告発され、死刑の判決をうけ、脱獄の誘を「悪法も法なり」と斥けて従容として獄吏の与えた毒杯を仰いで死んだのである。

彼は、自然学者アナクサゴラスがヌース（理性）を万物の運動原因としながらも、これを個々の人間の行為の原因としては認めず、かえってその機械的唯物論の立場で、行為の原因を筋肉や腱に帰しているのに失望した。彼によると筋肉や腱は行為不行為の不可欠的条件ではあるが、真の原因は行為するか否かの善悪を判断するわれわれ各自の「自己」または「霊魂」の如何にある。故に彼は同胞市民の腐敗の根源を、彼ら各自がその真の「自己」と「自己のもの、財産、名声、物欲など」との別を知らず、自己を自己のものに、霊魂を肉体に従属させる本末転倒にありとして、各自にその「自己」の重要性を自覚させ、各自を「自己のもの」に捉われない自由の人たらしめることを神から授かった使命と感じ、これにその後半生を捧げた。それは知恵の神アポロンの神殿に掲げられていた格言「おのれ自らを知れ、gnothisauton」の真意でもあったからである。そこで、当時プロタゴラスなどが自ら「知恵ある者（ソフィスト）」と称し、自ら「徳の教師」をもって任じていたのに対し、ソクラテス自らは、そうした徳（霊のよさ）について無知なる者であり、それ故に「知恵を愛求する者」であるとの意味で、自らフィロソフォス Philosophos（愛知者＝哲学者）と称し。その使命とした活動をフィロソフィア Philosophia（愛知活動＝哲学）と呼んだ。それ以来今日まで続く唯物論対観念論の闘争は、このような「霊魂をよくあるように気づかう」意識改造の実践の形で開始された。この意味で彼は観念論哲学の始祖ともいわれる。しかし、彼の「哲学」は未だ理論的体系の形をなさず、むしろ否定的、破邪的な実践であった。「この無知な愛知者」にとっては、真の「自己」や「霊魂」やその「よさ（徳）」は、未だ知られておらず、また、他によって教えらるるものでもなくて、各人がその「気づかいの哲学」によって各自の内に発見し自覚すべきもの、或は各自の陣痛によって美しく生み出さるべきものであった。その意味で彼はその「哲学」を「助産術」とも呼んだ。有名なソクラテスの「問答法」なるものも、実は「霊魂のよさ」なる徳についての各自の意識を

吟味尋問することによって各人を徳の自覚に生ける自由の人格たらしめる破邪的手段にほかならない。それは、もろもろの徳（勇気、節制、知恵、正義など）について、その「何であるか」即ち「普遍概念・本質」を厳しく問いただす問答の連続で行われた。それは、相手の答への欠陥や矛盾を指摘しながら、徳それ自体の真意に肉迫した点で、後にプラトン更に近代ではヘーゲル等によって発展させられた弁証法の源となった。またその問答が個々の具体的事例から普遍的な概念規定へと原理を追求した点ではプラトンのイデア（普遍的概念）の哲学やアリストテレスの実体（本質）論の先駆をなした。こうして、彼の意識改造を介して、ギリシャ哲学は外的な自然から内的な自然（人間の本性）を主とする学となるとともに、機械的唯物論から弁証法的観念論に移行した。

彼はアテナイの中流以上の家庭に

生まれたものと思われるが詳細は不明である。彼自らは何も書き残さず、彼の言行は主として門弟たちの著作から、ことにプラトンのソクラテス的諸対話編およびクセノフォンの『ソクラテスの思い出』などから察知されるのである。彼の前半生は、奴隷制民主主義の商業国アテナイがペリクレスの領導下に繁栄と多忙を極めた時期にあたり、従って彼の敏感鋭利な精神は、アテナの伝統が生んだ三大悲劇詩人、イオニアから外来の自然学者アナクサゴラスなど、同じくイオニア自然学で啓蒙された外来のソフィスト、プロタゴラスなど、さらに西方から来た神秘的・思弁的なピュタゴラス学徒やエレヤの弁証家たちをそれぞれの代表とする新旧内外の諸思潮のなかで、鍛錬され形成されて、批判的になったのであろうと言われている。（以上世界大百科事典）

第四章 士道論
～第一節 立志～

菅原 兵治

人生の兌換券

而も此処でいう「学問」とは決して現代多くの人々の考えているような単なる知識の記憶の意味ではない。陽明の所謂知行合一底の学問たるは勿論である。従って此処で「学問の道如何」との問に対して与えた「士心を立つるに在り」との答は、実はとりもなおさず「人生とは何ぞや」という問に対する答と見るべきものである。単なる学得底の問題としての「志を立つる」ということならば極めて容易なことである。然しえが一旦見性底の全生命の活事実としての問題となると、そは実に命がけの問題である。私共が如何なる志を立つるかということは、我が一生に対して兌換券を発行することなのである。一度発行した立志の兌換券の前には、私共は何時でも遇い難きこの人生の一切を提供するだけの覚悟を必要とする。この覚悟無き立志は未だ立志などいうに値すべきものではない。それは志の不渡手形であり、立志の遊戯である。

孔子は「学に志した」その志のために、彼の一生を惜しげもなく提供して、甘んじて「疏食を飯い水を飲み肱を曲げて之を枕とする」生涯の中に楽んでいるではないか。三十にして我立てりとか、四十にして惑わずとかいって見るが、人生実際の険岨につき当ると、未だ「志」すらも立っていなかったことに自ら狼狽し転倒することのあるを見ても、真個の「立志」ということが如何に真剣なるべきもの、命がけのものたるべきかを知り得るであろう。

「立志」は実に人生の開眼である。これあるが故に人間が、人格（格は「ただす」である。私共が「志」によって個々の要求群の是非を格して判断選択して行く力が即ち「人格」である）として生き得るのである。「志」は人生に斯くも切要である。而して志とは前述の如く「士たる心」である。かかるが故に私共が人生観を確立せんとするにはどうしても先ずこの「士」とは何ぞやの問題につきて慎思し、明弁する処が無ければならぬ。

格物について

三浦　夏南

『大学』のなかで、格物致知という言葉が出てくる。家を整え、国を治め、天下を平らかにする大業も自らの一身を修めることが根本であり、修身の根本は結局格物致知にあると大学に書いてあるが、格物致知とはどういう意味なのかというこ

とは諸説あるところである。中江藤樹先生は格物の物とは五事のことであり、貌言視聴思の五つを正すことであると言われている。私は礼楽射御書数の六芸であるという説が正しいのではないかと思っているが、要は致知ということは抽象的に行われるのではなく、五事なり六芸なり具体的な物を通して行われるということではないだろうか。本来心身は一体であって肉体を離れた思想というものは空論であるし、思想を離れた物質的、動物的人間というものも存在していない。例えば、藤樹先生の五事の中の言について考えてみると、心では敬っているけれでも、話し方は乱暴であるということはあり得ないことである。心に慎みがあれば、言葉も自ずから丁寧になるものであろう。逆に心の慎みを常に守りたいというのであれば、言葉遣いを疎かにしないようにしなければならない。ここに敬語や礼法というものの必然性が見えてくる。私が六芸の説に共感するのもこの点であり、古の人が明徳を明らかにしたのは、心で心を明らかにするような抽象的なことではなく、古代より伝えられた礼楽の実践のなかで体得されて来たものだと信ずるからである。明治以後の神道の大家である今泉定助先生も古の日本人の思想を理解するには、単に文献の研究だけでは不十分で、禊祓を実際に行うことにより、古代人と同じ心身一体の境地に至らなければ体得することができないと言っておられる。シナでは六芸という伝統があったのであろうが、我が国には神道の行事として格物の実体が伝わっているのはありがたいことである。シナでは定まれる君なく、易姓革命が繰り返し行われた為、古代よりの一貫した礼楽が伝わらず、ついに抽象的哲学的議論に堕してしまったとみるべきであろう。中江藤樹先生は日本人として学問をされたので、抽象的な思弁に納得することができず、五事という肉体と切り離すことのできない心の正し方を示されたのではないだろうか。我々も家を整えて行く中で、抽象的に心を慎み、家族で親しむのではなく、具体的に礼楽として生活を正して行きたいと思っている。禊祓の行事をはじめ、衣服、礼法、自給自足、食事、正すべきことは多々あるが、すぐに正すことのできるものとしてはやはり言葉であると思う。言葉は最も身近であるが、親しい間柄では最も疎かになりやすいものである。まずはすぐに実行できる言葉から正すことを今年一年の目標とし、可能なものから順次我が家の礼楽を正して行きたい。

とよくも農園だより

三浦　杏奈

今月は、中旬から下旬にかけて日中二十度を超えるような温かい日が続き、春の訪れを感じています。寒くて外に出づらかった息子たちも、畑に来ては簡単なお仕事を手伝ったり、畑の周りを走り回ったりして、家族七人で畑仕事が出来る日

もありました。

今月から、アスパラガスの朝・夕二回収穫がスタートしました。アスパラガスは高温多湿の状態を保つとよく成長します。そのため、気温が高い日の夕方や次の日は、背丈がぐんと伸びて収量も増え、太くて立派なアスパラガスが収穫できます。今月は周桑地域でアスパラガスを栽培している人たちの中でもトップクラスの収量を維持出来ていると指導員の方に褒めて頂きました。ハウスの温度を一定に保つ為に、風の強さや日照条件によってこまめにハウスの開け閉めを行ったことや、十日置きの追肥・毎日の少量多灌水を試行錯誤しながら実施した日々を、神様に認めて頂き、さらに前進できるよう背中を押されているような気がして、素直に嬉しく思いました。アスパラガスを収穫していて面白いなと思うことは、同じ株から出てくるアスパラガスは、何度出て来ようとも、似たような形質を受け継いでいる場合が多いということです。太くて立派なもの・先が曲がったもの、扁平のもの・糸のように細いものと様々なアスパラガスがあるのですが、同じ株からその次にでてくるものは、大概、その形質に似通っているのです。人間でいうと、家柄のようなものなのでしょうか。自分一人の力では容易には変え難い、目に見えない祖先からの大きな流れがあって、その上で生かされていると思うのです。その使命を自覚して生きていくことが大切なのだとアスパラガスに教えられている気がします。

厳しい寒さの後にくる春は毎年待ち遠しく思われ、三月が楽しみですが、同時に農業にとっては草が一気に繁り、虫や病気が多くなる気が抜けない月となります。家族一致団結して日々の小さな仕事を着実にこなし、農業の合間に、桜の咲く公園に家族でお花見に行けたら、また来月も充実したひと月になるだろうなと今から楽しみです。

★今後の予定

先月に引き続き個別での勉強会の対応をさせて頂いています。ご希望の方は事務局までお電話ください。

★一燈照偶　万燈照国

ひの心を継ぐ会は竹葉秀雄・近藤美佐子両先生の精神を継承し、発展させることを目的として生まれた会です。一人の「ひ」の精神が周囲の人々の心に「ひ」を燈し、やがてそれが国を照らす「ひ」になることを願い、活動を行っております。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

★年会費

一般会員	三千円
賛助会員	一万円
特別賛助会員	三万円
支援会員	一万円

★振込先

「ひの心を継ぐ会」
愛媛銀行・本町支店・普通預金
口座番号　６－４２７３５

※年会費未納の方はお手数ですが、お振込をお願い致します。
※入会希望・退会希望の際は、事務局までお問合せください。